

ギリシア喜劇断片 (二)

下 田 立 行

アレクシス (前四〜三世紀)

ΑΛΕΞΙΣ

アレクシスはギリシア中喜劇の代表的な作者の一人。『スーダ辞典』α 一―三八に「アレクシス。かつてはシュバリスと呼ばれたトゥーリオイ(イタリア半島南部の都市)の出身。喜劇詩人。二四五篇の喜劇を上演。喜劇詩人メナンドロスの叔父。ステパノスという子があり、これもまた喜劇詩人となった」とあり、イタリアの出身であると判断される。また、無名氏の『喜劇論』は、メナンドロスはアレクシスと共に多くの時を過ごし、アレクシスから教えを受けたと思われる、と述べている。この『喜劇論』には中喜劇の代表者としてアンティパネースとステパノスの名が挙がっているが、ステパノスはアレクシスの誤記である可能性が高く、また、他にも中喜劇の代表的詩人としてアンティパネースとトゥーリオイの人アレクシスを挙げた記録がある。散逸したとはいえ伝えられている作品数といい、残存断片数といい、アレクシスが中喜劇の代表的作家であったことは間違いない。

また、アレクシスが大変長命であったことは、プルータルコスが『神託の頽落について』四二〇Dで「そうすると……(エピクローヌス派の)メートロドローロスの方が喜劇詩人アレクシスより劣ってい

ることになる。アレクシスはメートロドローロスより二倍も長生きしたのだから……」とあり、メートロドローロスはディオゲネース・ラーティオス『ギリシア哲学者列伝』一〇・二三によると五三歳で死んだとあるから、二倍というのが概算にせよ、アレクシスは百歳近い長寿に恵まれたことになる。近年の研究でアレクシスの生没年は前三七六頃〜前二七〇頃と推定されている。

また、アレクシスの死についてプルータルコスは『老人によって政治は行なわれるべきか』七八五Bで、「喜劇詩人のビレーモンとアレクシスは、舞台上で演技をしたり、花冠を授けられている最中に、死に襲われた」と述べている。真偽のほどは定かでないが、喜劇詩人かつ俳優として彼らがある意味で理想的な死に方をしたことが人口に膾炙していたことを窺わせる内容であろう。その他断片的な刻文もアレクシスの活躍ぶりを暗示している。また、これと類似する話に、ストバイオス 四・五〇b・八三に、アリストテレーズ『才子伝』(仮名、散逸)からの引用として、「喜劇詩人アレクシスは年老いてよたよた歩いているところを人に見られ、「何をしていますのですか」と訊ねられて、「ゆっくりと死んでゆくところじゃ」と答えた」とある。

ローマにおける評判も高く、アウルス・ゲッリウス(一二三頃〜一六五)は『アッティカ夜話』二・二三・一で「私はわが国の詩人がギリシア詩人——例えばメナンドロス、ポセイディッポス、ア

ポッロドーロス、アレクシスその他数名の喜劇詩人——から借用したり翻案したりした喜劇をくり返し読んでいる……それらは機知に富みかつ魅力的に書かれているように見え、実際だれが見てもこれ以上のものは書かれえないと思われる……」と述べながら、それらをギリシアの原典と比較するときは足元にも及ばないとし、ギリシア喜劇の「軽妙洒脱さ」と「輝き」を絶賛している。いちいち名を挙げないがアレクシスの作品からラテン語に翻訳または翻案されたものがいくつか推定されている。

アレクシスの機知の一面を窺えるものにアテーナイオスの次の一節がある。「詩人アレクシスもサモスの人リュンケウス〔テオプラストスの弟子、文筆家で喜劇も書いた〕がいうところによると食通だった。口さがない連中が彼の食通ぶりをからかい、いちばん食べたいのは何だと訊ねると、アレクシスは「喧し屋の丸焼き」と答えた」(八・三四四C)。

また、プラトーン作と伝えられるエピグラムにアレクシスを謳ったものがある。プラトーンはアレクシスより五〇ほど年長であるが、その有名なエロス理論のためか、幾人もの少年への恋のエピグラムが彼の作として残されている。このエピグラムがプラトンの真作が偽作か定かでないが、どちらかといえば贋作の疑いが濃い。だが、当時アテナイの有名な人でアレクシスという人物は他に知られていないし、アレクシスはその喜劇の中でいくどかプラトーンを登場させ、揶揄の対象としたらしいから、エピグラム作者の意図としては喜劇詩人を指したものと考えてよさそうである。アレクシスの喜劇断片は後に譲るとして、一応伝プラトーン作のエピグラムを掲げておく。

アレクシスはきれいだ、私がたった一言いっただけなのに、

みんながあの子を見つめ、どこでもあの子を取り返る。
心よ、なんで犬に骨を見せてやり、後になって後悔するのか。
前にもそうしてバイドロスを失ったのではなかったか。

以下、アレクシスの喜劇の翻訳と注に移る。

『アンキュリオン』

Αἰκτῆριον

同名の喜劇をエウブローロスも書いている。アンキュリオンという人物については不明であるが、アリストパネス『蜂』一一七八への古注に、ディデュモスの注として、「カルドピオン」(『蜂』の同箇所で言及される人物)は調べる必要がある(つまり、判らない)。他に喜劇では取り上げられていない。だが、アンキュリオンが母親を好きなように処分した(?)ことは(喜劇に描かれている)。

一

自分の知らぬことを話しおってからに。駆けて行ってプラトンの仲間になってみる。そしたら分かるだろう、石鹼や玉葱のことが。

〈出典〉ディオゲネース・ラーテルティオス 三・二七。

【注】知らないことを自覚することから始まるのがソークラテースの弁証法だが、哲学者は喜劇の中では揶揄の対象とされることが多

かった。アテーナイオス 四・一六一Dにも「哲学者たちよ、君たちはそうしたことを何一つ訓練せず——そして、これが何よりも困った点だが——君たちが知らないことについてお喋りをする……」とある。

『アゴーニスまたは頭飾り』

ATONIS H ITHIKOS

『スーダ辞典』α三三五に、「アゴーニス。遊女の名」とあり、アレクサンドレイア出土の前三世紀の壺にもこの名が見える。また、キケローの『カエキリウス訴追者決定調査書』五五に「アゴーニスはリリュバエウム出身の女で、エリュクスのウエヌスの解放奴隷」とある。リリュバエウムはシシリー島西端の町でその北東四〇キロ程の所にエリュクス山（今の聖ジュリアーノ山）がある。この山にはかつてフェニキアの女神エリュキーネーの有名な祭祀があつて、ギリシア人はこの女神をアプロディーテーと同一視した。したがつて、「エリュクスのウエヌスの解放奴隷」という言葉は、その女神の加護を受ける遊女を意味する婉曲表現だと思われる。

副題のヒピスコス *Ἰπίσκος* は本来「仔馬」の意味だが、小クラティノスの喜劇『オムパレー』断片五「君たちが頭飾りか綾織りの衣を持っているなら」では、「ヘーシュキオス」八〇九に「ヒピスコス。頭に被るもの。女性用の飾り」とあるのと等しいと考えられる。スカーフのようなものか。本気劇の副題でヒピスコスがどちらを意味するか定かでない。

なお上演年代については、断片三でミスゴラスなる者が揶揄の対象となつてゐることから、前三四五年より少し後の上演とする説

がある。なぜなら、その年にアイスキネースが『ティーマルコス告発』演説を行い、その中でティーマルコスを男妾として囲ったミスゴラスの性的非行に触れているからである。

二

よそから来た客に会うと

宿へ「連れて行つた。色の黒い男がいる」。

そして小者どもに——家から二人連れてきてあつたので——

ソーダでピカピカに磨きあげた杯を出すよう命じた。

銀の杓もあるし「——そいつは確かに」

二ドラクメーの重さがあつた——、また六ドラクメーの

重さのある小杯や、一〇オボロスの冷やし鉢もある。

これなどはピリッピデースよりも薄手のやつだ。

B でも、法螺話といつても、よくもそんなことを考えついたものだ。

〈出典〉アテーナイオス 一一・五〇二F「ブシューゲウスなしブシュークテールと呼ばれる、葡萄酒を冷やす鉢について」アレクシスは「頭飾り」のなかで次のようにブシュークテリディオンと呼んでいる。【本断片一—八】。同六・二三〇B「銀の食器の用法について」アレクシスは『頭飾り』の中に恋する若者を登場させ、恋の対象である女に財産を誇示して次のように言わせている。【本断片三—九】。

【注】本断片は二行目、五行目に疑義があり、さまざまな校訂がな

されている。特に二行目、Herwerden による校訂は、訳せば「僕がアゴニスと一緒にいた」(宿にかかるとなっており、「色の黒い男」を題名となっている遊女の名に変えてしまうもので、ロオプ古典叢書版で採用されているが必然性はなく、どちらかという趣味的な試案である。「色の黒い男」とした部分はエティオピア人とする説、情熱的な、好色な男とする説がある。五行目は Keibel の校訂に従ったが、内容的に妥当なところと思われる。

この断片全体の理解にはアテーナイオス 六・二三〇B の引用の前後の言及が大いに参考になる。それは、実際は貧乏なのに惚れた女に財産自慢をするという趣旨であり、喜劇の登場人物の一つの典型である「見えっ張り」の例ということになる。B 以下は惚れた女の言葉か、それとも脇で聞いている別の登場人物の傍白か。

貨幣単位にも使われるドラクメーとオボロスはここでは重量単位で、一ドラクメーは六オボロスにあたり、アッティカ単位で一ドラクメーは四、七三グラム。これを一応あてはめると、銀の杓は九グラム弱、小杯は二六グラムほど、さらに葡萄酒と水を交ぜたものを素早く冷やすための冷やし鉢は、八グラム弱ということになる。これらの数値は常識的に小さすぎると思われるのだが、ピリッピデースより薄手といっているのが、極端に薄く作られていることに希少価値がある、と考えての作り話と思われる。B の語り手の言葉もその着想に関心しての、というより嘲つての、ものと見てよいであろう。ピリッピデースなる人物については、アレクシス断片一四八にピリッピドオマイという造語動詞があつて極端に痩せるという意味で用いられている。詳しくはその断片で。

三

お母さん、お願い、私にミスゴラースを
けしかけないでちょうだい。私はキタラ弾きじゃないんだから。

〈出典〉アテーナイオス 八・三三九C。

【注】キタラは七弦琴の一種。「キタラ弾き」は笛吹き女などと同じく、宴席に侍つて楽器を奏で、夜の相手もする娼婦を指すと思われる。ただし、語形上女性とは断定できないこと、また、上記アイスキネースの『ティーマルコス告発』でミスゴラースが男色家として名指しされていることを思えば、あるいは男かもしれない。ただし、ギリシアの男色家は女性に拒絶反応を示したわけではなく、ふつう両性愛者であつたことを思えば、ここで語っている人物が女性である可能性もある。キタラ弾きが女性である例は他にもある。なお、アンティパネースにもミスゴラースが「キタラ弾き」に目がないことを述べる箇所があるが、そこは複数であるためであつて、やはり男とは断定できない。なお、原典一行目はエウリーピデース『オレステース』二五五行に全く等しい。

四

その三番目の男は
無花果を巻いた冠を被っている。
B だが、やつは

生きているときもそんなものが大好きだった……………

〈出典〉アテーナイオス 一五・六七八E。

【注】一説には、二人の話し手は死者の亡霊を見ているかのようである、と。また、三番目の男とは、三百代言ないし誣告者、密告者であろうともいわれる。というのは、三百代言等にあたるシューコパンテースという語が直訳では「無花果を見せる人」の意だからだが、これがなぜ三百代言等の意味になったかは古来議論の分かれるところである。Cf. Chantraine, *dictionnaire étymologique de la langue grecque*, p.1069.

五

生の葡萄酒をなみなみと湛えたテーリクレースの壺をひきずった、縁から泡立ちこぼれそうなのを……………

〈出典〉アテーナイオス 一・四七一E。

【注】テーリクレースはアリストパネスと同時代のコリントス陶芸家であるが、容器類、特に陶土、木材、金属で作られた杯がテーリクレースにちなんでテーリクレイアなどと名付けられたといわれる。実際には主にアテーナイで製造された。中喜劇の時代にはすでに極く上質の器を指す属名となっていた。

六

《ペイディッポスには——この人も干し魚売りだったので——アレクシスが『頭飾り』と『箱』の中で言及している》。

〈出典〉アテーナイオス 三・一二〇B。

『兄弟』

ΑΔΕΛΦΟΙ

同名の喜劇を書いた詩人は多い。ギリシアではアレクシスの他にメナンドロス、ピレーモーン、アポッロドーロス、エウプローン、ヘーゲシッポス、ローマではテレンティウス、ポンポニウス。

七

じゃあ、俺がこの娘たちになにか与えたと？ いってみる。

B いや、たぶん質にとってあったものを返したというのさ。

〈出典〉アテーナイオス 七・二二三F。

『山羊飼いたち』

ΑΙΠΟΒΟΙ

クラティノースは『牛飼いたち』を書いている。

八

《死に至る三つの方法》。この諺にはアレクシス（流布本でアレクサンドロス）が『山羊飼い』の中で言及している。アリストイデースは次のように言っている。デルボイで伺いをたてる者は神託を受けとるが、その神託は封印されており、彼にはあらかじめ〈定められた日が来る前に神託を開封するなら、三つの罰のうちの一つが下されよう。すなわち、両眼か片手か舌を失わなければならない〉と告げられていた、と。またある者たちは、三十人政権の時代には死を宣告された者に三つの方法、つまり、剣、首吊り、毒人参からの選択が許された、と述べている。』

〈出典〉ゼーノビオス（流布本） 六・一一。

【注】ソポクレース断片九〇八（Radt）（作品名不祥）に、「私は開封するだろう、たとえ三つの（罰の）一つを受けることになるうとも」とあり、その断片を引用するビンダロス『オリュムピア競技祝勝歌』一・九七以下への古注に「ある者たちの説では、〈三つ〉とは等しく死をもたらすもので、剣、首吊り、崖のことだという」としてソポクレースの断片を引いている。したがって、「死に至る三つの方法」という諺には、神罰、自殺、死刑とさまざまな解釈があつて、この諺の真意ははっきりしない。ただ、時と場所によって異なった意味で用いられたとも考えられる。もちろん、この準断片しか残っていない『山羊飼い』の中で、この諺がどのように利用されたいるかは解らない。

『アイソーポス』

AIZOHOZ

アイソーポスはいうまでもなく前六世紀の寓話作者ないし語り手と伝えられる人物、いわゆるイソップである。一断片しか残っていないが、ほぼ同時代の有名な政治家ソロンとの対話という形をとる、一二行に及ぶ断片である。

九

アイソーポス ソロンさん、あなた方のお国アテナイでは、そのように洒落たやり方をなさっている。

ソロン どういうのが？

アイソーポス 酒宴の席であなたがたは生の酒をおやりにならないことですよ。

ソロン それは容易でないですから。というのは車の中ですでに水と混ぜたのを売っていますからね。

でも、それはなにも儲けようというのではない。痛飲しても買う人の頭が変にならないように、気をつかっているのです。それが、お見とおしのとおり、ギリシア式の

飲み方なのです。ほどほどの大きさの杯をつかって呑みながら、

ああだこうだとお喋りしたり、楽しく馬鹿話をするのがね。

だって、そうでなくちゃ呑むでなく、浴びるというやつですよ。冷やし甕だのどんぶりだので呑むのはね。

アイソーポス いや、むしろ死というべきです……

〈出典〉アテーナイオス 一〇・四三一D「ヘーゲーサンドロスが『覚書』で述べているところによると、スパルタ人リュサンドロスは野営地で商人が水っぽい酒を売っているのを見て、それを水で割っているものとして売るよう命じた。その腹はもつと濃い酒を仕入れさせようということで、なかなかウイットに富んだやり方だ、としている。似たようなことをアレクシスも『アイソポス』で次のように述べている。【本断片】」。

【注】アイソポスとソローンの間にこのような対話があったかどうか、それどころか二人が会ったかどうか定かではない。しかし、当代一の寓話作者（語り手）と七賢人の一人の対話というのはおもしろい着想である。同名の喜劇を書いた詩人が知られていないという点も、アレクシスの独創性をかんじさせる。「痛飲」と訳した語はブリュニコスの『美文入門』に「夕刻から明け方まで飲むこと」とあるそうである。

『虜囚』

ΑΙΧΜΑΛΟΤΟΣ

ソポクレースが『囚われの女たち』、ローマ喜劇詩人のプラウトゥスが『虜囚たち』を書いている。これまた一語断片である。原題は槍（アイクメー）によって、とらえられた（ハロートス）の意の複合語。

一〇

《ヘーミカコン ἡμίκακον。アレクシスが『虜囚』で》。

〈出典〉『反アッティカ主義辞典』。

【注】ブリュニコスが『アッティカ動詞、名詞選』で「ヘーミカコンとはそれほど悪党ではない、半悪人についていう」と述べている。チンピラといったところか。これは形容詞であるが、もちろん名詞にもなりうる。エウクレイデースが形容詞形を用い、アリストパネースが副詞形のヘーミカコースを用いている。

『油を塗る女』

ΛΑΕΙΠΤΡΙΑ

原題のアレイプトリアはアレイプテース ἀλειπτερόςの女性形である。アレイプテースは「(体操場で体育の訓練を受ける者に)油を塗る人」の原義から体育教師の意味で用いられる。ポルクス七・一七に「アレイプテースは用いられなくなったため、中喜劇詩人たちはアレイプトリアといっており、リュシアースも『ディオパンテース弁護演説』の中でその場所（アレイプテリオンすなわち体操場で油を塗るための場所ないし部屋）に関連して女性形を用いている」とあるのは、体育教師がいなくなったというのではなく、油を塗る役割は専ら女性の仕事となった、ということであろう。ただし、実際に引用のあるアテーナイオス 一二三Bでは、アンティバ

ネースの作としながらアレクシスの作とも伝えられるとして引用している、断片訳はアンティパネースの方に譲る。同名の喜劇をアムピスとディーピロスが書いたとされるが、いずれも書名しか伝わらない。

『葡萄園主』

ΑΜΠΕΟΡΤΟΣ

同名の喜劇をアムピスも書いている。

一

《アナデンドラス *ἀναδενδράς* (木に巻き付いて成長するもの＝葡萄の木)。アレクシスが『葡萄園主』で》。

《出典》『反アッティカ主義辞典』八二・四。

【注】ただし、アナデンドラスには「葡萄の枝で非常に長く伸びたもの」という解釈もある。

一二

《アポロゲーテーナイ *Ἀπολογητικαί*。アポロゲーサスタイ *ἀπολογισαί* の代わりに。アレクシスが『葡萄園主』で》。

《出典》『反アッティカ主義辞典』八二・五。

【注】アポロゲオマイ「弁明する」のアオリストは中動相であるが、アレクシスは同じ意味で受動相を用いている、ということ。

『アムポータイス』

ΑΜΦΟΤΙΣ

ボルックス 一〇・一七五に、『アムポータイス』という劇はアレクシスの作」とある。アムポータイス *ἀμφότες* には、一、把手が二つある桶、バケツ、二、耳を覆うもの、の二義あり、残存断片だけではどちらとも決めにくい。だが、ボルックスは同処でこれを田舎で用いられる(?) 器具の一つとし、この語を使用した人として喜劇詩人プラトーンとアイスキュロス(『ケルキュオン』)の名を挙げている。アイスキュロス断片一〇二は、アムポータイスがイヤリングのすぐ側にあるという内容で、これらを総合すると何か耳を覆うものを指している可能性が高い。『大語源辞典』はアムポータイスを、レスラーが耳に当てる銅製の器具とし、その他にも同様の発言を為す者は多い。この場合「耳当て」は耳を保護するためのものと考えられる。プルータルコス『聴くことについて』三八Bに、クセノクラテースが、レスラーは殴られても耳の形を損なうだけだが、少年は聞く言葉によって性格を損なわれるから、という理由で子供に「耳当て」を付けるのがよいと忠告した、という挿話がある。

一三

これら礪臼を削って作る職人の一人が……

〈出典〉ボルックス 七・二〇、「今日ミュロコボス(碾臼職人)」と称される人をアレクシスは『アムポーティス』の中でオノコボスと言った。【本断片】

【注】「碾臼」としたのは、オノス・アレトーン *ὄνος ἀλεῖται*。前半のオノスは、本来「驢馬」の意味で、その重い荷を運ぶ駄獣としての性格から、巻き上げ機、碾臼の上石などに転用され、さらに碾臼そのものをも指すようになった。アレトーンはアレオー *ἀλέω*「挽く、すりつぶす」からの派生語でアレテース *ἀλετής* に同じ。本来碾臼を意味する語はミュレーないしミュロスで (*μύλη, μύλος*) ラテン語 *mola*「石臼」、英 *mill*、仏 *meule*、独 *Mühle* などと同根である。

一四

ある動詞の命令法の形態に関するもので、省略。

『アンティア』

ANTEIA

アテーナイオス 三・一二七に、アンティパネース(前四世紀)の『アンティア』をアレクシスの作とする少数意見があることが、否定的に述べられている。断片についてはアンティパネースのところで扱う。

『あきめくら』

ΑΙΕΓΓΑΤΚΜΕΝΟΣ

原題に含まれるグラウコー *γλαυκός* という要素は、「白そひ、白内障」を指す医学用語であるが、ローマの喜劇詩人ブラウトゥス(前三〜四世紀)は、ギリシア語から借用したこの語 (*glau-cuna*) を比喩的に用いて、見ていながら見えない、気がつかない状態を表現している。本喜劇の題名は逐語訳では『白内障にかかった男』の意味であるが、喜劇作品としてはやはり比喩的に用いられている可能性が高からう。なお、岩波文庫『食卓の賢人たち』(柳沼重剛訳)に断片一五を含む箇所があり、そこでは『そ、こひを病む男』と訳されている。どちらが原題の本来持つ意図に近いかわからないが、敢えて変えない。なお、柳沼訳を大いに参考にさせて頂いた。

一五

- A 俺からはな、一品ごとにこれこれ幾らだといってくれねえと、
びた一文だって割り前の金を取るわけにはいかないぜ。
B そりゃもつともだがな。
A ほら、勘定板も石もある。言え。
B 鮐の肩肉の酢漬けが銅五枚。
A はい、次ぎ。
B ムール貝が銅七枚。

A 今んとこ、誤魔化しはないな。次ぎ。

B 雲丹が一オボロス。

A まだ殊勝なもんだ。

B 次はお前が大声で褒めちぎったキャベツだったな？

A そう。あれは美味かったからな。

B それに二オボロス払った。

A 糞っ、何で褒めたりしたんだ、俺は。

B 一年ものの鰯の角切り塩漬に三オボロス。

A そのぐらいいはするさ。お前、チコリのことは一言も言っていないぞ。

B 極楽トンボがあてめえのことだ。お前、市場のことは何にも知らないな。パッタの群が野菜を食いつくしちまったんだぜ。

A てめえ、塩漬魚を二倍に吊り上げやがったのはそのためか？

B それは魚屋だよ。行って訊いてみな。穴子は一〇オボロスだ。

A 高くないさ。それから？

B ああ焼き魚に一ドラクメかったんだ。

A うひゃー、熱病みたいだな。山を越したと思ったら、また上るんだ。

B これに酒を足してみな。お前が酔っ払ってるうちに一瓶追加したんだ。全部で瓶が三つ。一瓶は一〇オボロスだ。

〈出典〉アテーナイオス 三・一一七、『『あきめくら』の中で食費の割り勘を払えといわれた男がいう。【本断片】。』

【注】本断片はイアムボス・トリメトロスで一九行あるが、日本語での読みやすさを考えて話し手が替わるとに改行した。原典一、

一〇、一七行に壊れた箇所があり、いろいろ校訂の試みがなされているが、ここでは意味が通りやすく、前後関係にも支障を来さないものを選んだつもりである。

「勘定板」と「石」と訳した、アバキオン *abakion*、プセーボス *psēbos* は合わせて計算に用いられた、算盤の前身のような道具。前者はアバクス *abax* の縮小辞。アバクスは本来砂を振りかけた板で、数学者が計算に用いた。計算用具としての板は古代広く用いられ、水平ないし垂直方向に数本の線が引かれ、それにそれぞれの数体系に従って段階的に位（単位）が当てはめられる（十進法で一の位、十の位という風に）。それぞれの位の数は書いたり、小石を置いたりして示す。その数がある位を満たした時、上位の位に換算される。本断片では「銅」「オボロス」「ドラクメ」の三種の単位が用いられており、銅八枚が一オボロス、六オボロスが一ドラクメに当たる。だから、銅の位に八個目の石が置かれる瞬間に、銅の位の八個の石が取り除かれ、オボロスの位に一個加えられることになる。数が大きくなると石を置くのも大変で、単位をさらに分割した位も作られたようだが、ここに出てくるような日常の計算には簡素なもので十分だったであろう。なお、断片最後の方の酒（ワイン）の瓶 *krates* は、一瓶が約三リットル余りの大きなものとされる。断片九から解るようにすでに水で薄められているかとも思われるが、大変な量であるには違いない。

本断片では酒の肴と思われるものが色々紹介されている。パッタの被害による野菜不足という状況が設定されているせいか、魚介類がほとんどであるが、当然ながら厳密な種の特定は困難である。キャベツを褒めたところがあるが、どんな料理法なのか興味深いことではある。これら酒肴の類に一応の解説を加える。「鰯の肩肉の酢漬け」

の原語はオーモタリーコス *aiotapaxos* で、Liddell & Scott に、恐らくとして、記されているのに従った。プリーニウスは、鮪は首と腹が美味と述べている。ただ、鮪はギリシア語で テュンノス *tyunos* で、ラテン語 *Thynnus*、英 *tuna* 以下。オーモタリーコスという単語自体は、その後半、タリーコス *tapixos* は塩、酢などで締めたり、燻製にしたりして保存が利くようにした肉類、特に魚を指す。一般に魚のマリネと考えてよいだろう。だが、前半の *aiot-* が名詞 *aios* 「肩」か、形容詞 *aios* 「生の」か判然としない。ただし、*aiot-* が語頭に付いた合成語では、ほとんどが「生の」の意味であり、こちらで解釈すれば、酢漬けにしる塩漬けにしる火を通さないで食べられる魚はオーモタリーコスと呼びうるのではないかもちろん、言葉には語源的解釈からは想像もつかない意味が付与されていても不思議はない。「ムール貝」は原語が *mus* で「鼠」が本来の意味。ラmusとその縮小辞 *musculus*、英 *mussel*、仏 *moque* 以下。アリストテレス『動物誌』五二八 a に「殻の表面が滑らかな牡蠣と違って開口部の薄い二枚貝」とされる。語源的にも、形態的(鼠)にもムール貝(紫貽貝)が当てはまるであろう。「雲丹」エキーノス *echinos* で、これは本来「針鼠」から。アリストテレス『動物誌』四・五に「卵巣が生で食される」とある。他に塩漬けにしたり、ダシをとったりする用法もあったという。「一年ものの鮪の角切り塩漬」は説明的な訳で、原語はキュビオン *kybion*。一年もののマグロはペーラミュス *perlamys* と呼ばれた。キュボス *kybos* 「立方体、サイコロ形」からの派生語。日本語で角煮といえぱふつう豚か鯉であるのに似た用語法と見られる。「チコリ」は壊れた部分の *Kaibel* の校訂による訳。だが、壊れ方がひどいので、種々の校訂があるが特に信憑性に富むものはない。ただ、以下の文

との関係で野菜類に関わることは間違いないので、一応 *Kaibel* 説をとった。

一六

俺はね、將軍連中が眉を吊り上げて気取ってるのを見ると、変挺りんなことをしてやがるとは思うけれどね、
 国中の人から一目置かれてるんだもの、他より少し
 お高くとまってるからって、そう驚きはしないんだ。
 でもね、どうせ碌な死に方をしない魚屋風情がね、
 下を向いたままで、眉が頭の天辺にくつきそうなほど
 持ち上げてるのを見ると、ムッと息が詰まりそうになるぜ。
 まあ、「この鰯は二尾でいくらだい」と訊いてみねえ。
 「一〇オボロスですがな」というよ。「法外だぜそりゃ。
 八オボロスにしときねえ」「もう一尾買うならようがす」
 「なあ兄い、巫山戯てねえでこれを取りな」「その値で？
 やがれ」
 こんなだからな、胆汁よりも苦々しいじゃねえか。

〈出典〉アテーナイオス 六・二二四 F、「アレクシスが『あきめくら』で、【本断片】」。

【注】眉の動きや位置は人間の精神状態を示す一つの指標となる。眉を寄せる、吊り上げる、顰めるなどは、悲しみ、不快、誇り、尊大さ等に用いられるが、動詞は必ずしも一定しない。この箇所では尊大さ、横柄さを示すことは内容から自明であろう。アテーナイオス

この箇所の前後では、いくつかの喜劇から魚屋の悪口（ふっかける、素性が悪い、狡猾など）が引用されている。喜劇はなんでも笑いの種にしたから、ネタとして商売なんなんでも良さそうだが、魚介類のことは毎日の生活に関わるだけに痛切なものがあるかもしれない。少々値が張っても美味そうなら買ってしまふ、高すぎて買えなければ文句の一つも言いたくなる、魚好きの痛い所を突いているともいえよう。断片一五と併せて、古代ギリシアの庶民の生活を身近に感じさせる資料である。

鰯はケストラ *χέστρα* で、辞書にスピュライナ *σπυραῖνα* のこととあり、アテーナイオスも三二三Bで「アテーナイ人はスピュライナのことを大抵ケストラと呼び、スピュライナという語を用いることは稀である」と述べている。ケストラも、スピュライナの語源であるスピュラ *σπυρα* も「ハンマー」が原義で、同意語による言い換えと見られる。体形が円筒形で頭が堅いことから名付けられたらしい。

一七

奇麗な柄のある

小魚の煮たのが少々手元にあったもので……

〈出典〉アテーナイオス 三〇一A、「ヘプセートス *ἐπὶ ἥτος* : 種々の小魚に用いられる語。……（中略）……アレクシスが『あきめくら』で、【本断片】。奇麗なものはすべてダイダロスの技と言われるからだ。また、……」

【注】ダイダロスは工芸や建築の神様のような神話的人物。「奇麗な柄のある」と訳したのはダイダレオス *δαίδαλεος* という形容詞で、アテーナイオスの引用の後の一文はその点を説明したもののだが、「奇麗」というのが魚の柄のことか、煮方のことか必ずしも明確でない。ヘプセートス *ἐπὶ ἥτος* は、LSJ に *smallfish boiled for eating* とあり、*ἐψη* 「煮る」からの派生語。魚の種類を特定しない台所用語であつたらしい。だが、類語の *ἐψητεῖς*（複数形）は単に、「小魚」の意とされ、アテーナイオスの出典引用箇所の冒頭も、料理法には触れていない。ヘプセートスは次の断片にも現れる。

一八

それじゃ、このニベを試してみないかね？

それとも、鰯は？ 小魚の煮たのは言うまでもないがね。

〈出典〉アテーナイオス 三〇一B。断片一七の引用箇所に続く。

【注】「ニベ」と訳したコラキーノス *κορακιῖνος* は曖昧だが、ニベないしズメダイの類いとされる。「鰯」トリキス *τρικίς* は骨が髪の毛（属格で *τρικὸς*）のように細いことからの名称。いずれも安価な魚であつたらしい。

以上『あきめくら』の断片は、すべてアテーナイオス『食卓の賢人たち』からの引用で、食物としての魚にはほぼ話題が限定されている。断片一五ではなかなか高級そうな魚介類が話題になり、その値が高いことが二人の飲み仲間によって語られる。断片一六は、横柄な魚屋に対する怒りが表現される。断片一七、一八に登場する魚は

安価なように思われる。この二つの断片、特に一八は魚屋が貧乏人に下魚を奨めている言葉かもしれない。いずれにせよ、劇の主題は解らないし、劇の題名の意味するところも解らないが、これら断片はなかなか面白いものがある。

『アポバテース』

ΑΙΟΒΑΤΗΣ

ポージェイオス α二四四九『スーダ辞典』α三五二〇に、「アポバテース *αποβάτης* とは馬を使う競技の一種で、この競技を行うことをアポバイノー〔動詞、原文ではアオリスト不定法〕』とある。ここに見えるアポバイノーという動詞のもっとも基本的な意味は、「(船、馬などから) 降りる、離れる」であるが、LSJには、馬から馬へ跳び移る技(それを行う人) について言うらしい、とある。プルートアルコス『ポキオーン伝』二〇でこの競技のことが触れられているが、詳しい説明はない。しかし、パウリの大辞典のアポバテースの項目によると、ハリカルナッソスのディオニューシオス(前一世紀の修辞家・歴史家)『ローマ古代史』七・七三に、「戦車競技の馬がゴールに着くと、御者の脇に座っている者(これを詩人はパラバテースといい、アテナイ人はアポバテースという)が戦車から跳び降り、一スタディオンの(一八〇メートル弱)の距離を互いに競い合う」とある。これはローマの競技の記述だが、訳する際に括弧に入れた説明もあり、基本的にはギリシアのその模倣と考えてよからう。詳細は解らないが、ある壺絵では、跳び降りた競技者が戦車の進行方向とは逆向きに走ろうとするように描かれているという。LSJの説明には根拠があるようでないし、やはり語

源的に無理がある。ディーピロス(四〜三世紀)にも同名の喜劇がある。

一九

- A こちらが作曲家のコロニコスさんです。
- B どのような歌をお作りになるのでしょうか？
- A 極めて荘厳な歌をお作りになられる。
- B この方はアルガースと比べてどうですか？
- A 一日行程分アルガースより勝っていますよ。

〈出典〉アテナイオス 六三八BC、「そして、不道徳な歌を作る作曲家たちも現れた。彼らについてはエレススのパイニアースが『ソフィストへの反論』の中で以下のごとく述べている。ヘビュザンティオンのテレニコスおよびアルガースは不道徳な歌の作者であり、その作詞法の独自のスタイルで流行つてはいたが、テルパンドロスやプリュルニスの歌には到底及ぶべくもなかった」〔断片一〇 Weinl.〕。アルガースはアレクシスが『アポバテース』の中で次のように言及している。【本断片】。エウスタテイオス『イリーリアス注解』一二二六・一四、「ある荘厳な歌の作者ともっと平凡な作者を比較して、前者の方が一日行程分勝っている、といった人がある。それを書いたのはアレクシスだといわれている」。

【注】「作曲家」としたのはポージェイオス *ποιητής* で詩人という意味が一般的であるが、ここでは詩も曲も作る作曲家ととてよからう。アテナイオスの引用に現れるテルパンドロス(前七世

紀)は自作の詩やホメーロスの叙事詩に曲を付けた、古代音楽史上ある程度輪郭のはっきりした最初の作曲家とされる。ホメーロスの叙事詩はラプソードスと呼ばれる吟唱詩人によって朗唱されたが、テルバンドロスのものにはメロディーが備わっており、キタラ(リュラの大型のもので、今日のハープに近い)の伴奏で歌われた。その他にも音楽史上テルバンドロスの功績とされる新発明がいくつか伝えられているが、このメロディーを持った曲は「ノモス」と呼ばれ、テルバンドロスがその創始者とされる。そしてこのノモスの革新を行ったのが、ブリュニス(前五世紀)とされる。ただ、このノモスという語は次第に詩と曲の双方を合わせた意味で用いられるようになった。出典で引用されたパイニアース(ペリパトス学派に属し、主に歴史書を書いた。テオプラストスと同郷で、ともにアリストテレスの弟子)の文中の「歌」はノモスの訳。断片中の「歌」は歌う~~ἀδῶν~~と関連する~~ἀδῶν~~という語が使われている。コロニコスは架空の人物と思われるが、テレニコスを念頭に置いたものかもしれない。アルガースはパイニアースの断片からテレニコスと同じく実在したことが分かるが、作品はまったく残っていない。ブルータルコス『デーモステネース伝』四・八に、デーモステネースの綽名に「アルガース」というのがあったことについて、「アルガースとは通俗で悩ましい歌の作者の名で……」とある。アテーナイオスからの引用文中、「不道徳な」と訳した語はモクテローロスではindecentとなっている。エウスタティオスは「一日行程分勝っている」という表現に興味があったらしい。

『切断される男』

APHOKITOMENOS

断片二一のアテーナイオスでは、題名が女性形で引用されている。断片二〇からの推測で「遊女によって翼を切り落とされるエロース神」、また、「去勢された男」といった推測があるが、判然としない。題名は「切り離す」という意味の動詞の現在受動分詞男性形であるが、完了受動分詞は「去勢された男」Ⅱ「宦官」の意味で使われる。一つの解釈として考えられることがあるが、それは断片二〇の【注】で。

二〇

知ったかぶりたちによって、
こんなお話しが語られている。エロース神は
空を飛ばぬが、恋する男は飛ぶ。ところが無茶なことに
彼の神が責任をとらされ、無知な画家たちは
エロース神が翼を生やしているように描いているのだ、と……

〈出典〉アテーナイオス 五六二B。

【注】ヘーリオドーロス『エティオピア物語』四・二・三に、「画家たちもエロース神を翼あるものとして描くことで、この神に屈服した者の敏捷さを暗示している……」とあり、インドールス(後六〇二―三六、セビーリヤの司教)も『語源』八・一一・八〇で同様

のことを述べている。太古、世界の創造を司る神の一人として手を加えない岩石の形で崇拜されることもあった神が、最終的に翼の生えた赤子、いわゆるキューピッドの形をとるまでには、さまざまな変遷があったが、ここで触れる余裕はない。ただ文献上は、哲学者のプラトーンが『パイドロス』二五二bでホメーリダイ（ホメーロスの子孫を名乗って吟誦を生業とする者たちの組合のようなもの）の詩句を引用したものに、「エロースは羽を生やす力を持つゆえに、神々はこの神をプテロースと呼ぶ」、という駄洒落に近い言及があるのが、エロースと羽を関連づけた最初の例らしい（プテロースは *Πτερος* で *Πτερόν* をとる）、エロース。羽は *πτερόν*）。ところで、「羽を生やす力を持つ」とした解釈が正しければ、エロースは人間などに比喩的な意味で羽を生やすさせるわけで、真意はヘーリオドローロスやイシドールスに近い。従って題名の『切断される男』も比喩的な意味で、恋のために羽が生えたようになっていたのを、どういふわけか、羽を切り落とされて失速しようとしている男、と取れなくもないのではないか。このような意味合いなら、分詞の女性形も違和感のない間違いとして起こりうることである。

二二

というのは、カイレアースは宴会の幹事というより、死刑執行人だったからな。お祝いに柄杓二〇杯も空けおって……

〈出典〉アテーナイオス 四三二C。

【注】Kockが「あまり大量に飲ませることで宴会の出席者たちを

殺しそうだったということ、冗談にカイレアースなる男が死刑執行人になぞらえられている」と。プルタルコス『モラリア』六二〇A以下「宴会の幹事はどういう人物であるべきか」で、宴会の幹事（シムポシアルコス *symposiarchos*）のあり方について論じている。それによると宴会の幹事は酒宴の諸事万端を切り盛りし、出席者がみな楽しく過ごせることを目標とすべきであり、また自分がすぐ酔い潰れるようでもいけないし、まったく飲めないのでもよくない、といったことが言われているが、本断片でシムポシアルコスの任に当たったカイレアースなる人物は、酒量が平均以上に多く盛んに乾杯の音頭を取ることで出席者に飲ませ過ぎたらしい。

『アルキロコス』

ΑΡΧΙΛΟΧΟΣ

アルキロコスは前七世紀半ばに活躍し、批判・風刺精神に富むと同時に、時に激情的、攻撃的、だが時に抒情味あふれる詩を書いたギリシア抒情詩や諷刺詩の草分け的存在。古代、抒情詩のアルキロコスは叙事詩のホメーロスと並び称されるほどの評価を得ていた。しかし、断片二三の引用では喜劇名が複数形『アルキロコスたち』となっている。クラテイーノス（前五世紀）に複数形の題名の作がある。

二二

みごとに城砦のあるパロス島に住む、幸せなご老体よ、

そこはどんな土地も及ばぬほど見事なものを二つ産するという、

一つに神々を飾る石、一つに人間のための菓子……

〈出典〉アテーナイオス 六四四B、「ヘレスポントスに臨むパリオンでは素敵な菓子を食べるができるのは、そこを訪れた者たちが証言している。すなわち、アレクシスがパロス産の菓子のことを言ったとき、彼は間違っていたのだ。彼は『アルキロコス』と題された作品の中でこのように述べている。【本断片】」。

【注】本断片は喜劇には珍しくダクテュロス・ヘクサメトロス（叙事詩の韻律）で書かれており、また、ホメーロス風讃歌の文体を模倣しているといわれる。「神々を飾る石」とは大理石のことで、パロス島は良質の大理石を産することでも有名であった。ストラボン『地誌』一〇・五・七に、「タソス島とプロボンティス（今日のマラマラ海）に臨むパリオンはパロスからの植民市。…（中略）…パロス島ではヘパロスの石」と呼ばれる、大理石彫刻のためにもっとも上質な石が産する」と。アテーナイオス引用部分の「ヘレスポントス」は海峡部分だけでなくマラマラ海を含めた意味で用いられている。「菓子」プラクース *prakous* はアオイ科植物の種の名でもあり、それに形が似ているという（LSJ）が、不明。だが、アテーナイオスの引用箇所前後では、この語が菓子を指す一般名のような扱いで、様々な菓子を説明するのに用いられている。従って、アレクシスが間違っているという指摘は、どうも説得力に欠ける。ロオブ古典叢書で flat cake と訳されているプラクースは、プラコエイス *prakoeis* の約まった形であり、この語の前半の語構成要素であるプラクス *prakas*（属格 *prakos*）は「平べったい形のもの」を指すことから、そのような形の菓子を意味するという。

パロス島はアルキロコス生誕の島である。断片二三は省略。

『アスクレーピオクレイデース』

ΑΣΚΛΗΠΙΟΚΛΕΙΔΗΣ

題名は他に確認されていない固有名詞。語の構成としては、形式上の相似であるが、ヘーラクレイデースなどに同じ。英雄ヘーラクレースの名は、女神ヘーラーの名と「名譽、栄光」を意味するクレオスが合成してできたものだが、クレオスから派生した後半部分クレースは、ソポクレス、ペリクレス、アリストクレス、ティモクレス等、人名によく見られる。そして、例えばヘーラクレースの子孫という意味の人名はヘーラクレイデースとなり、この名を持つ著作家はLSJの冒頭著作家名表に載っているもので七名を数える。ヘーラクレスに相当するアスクレーピオクレースも確認されつつある（cf. A Lexicon of Greek Personal Names vol. I ed. P. M. Fraser & E. Matthews）。言うまでもなくアスクレーピオスは医療神であり、それから喜劇詩人によって造語されたアスクレーピオクレイデースという名は、何らかの意味で医師と関連していると見てよいであろう。ただ、治療する側か、治療を受けるべき側かは、解らない。

二四

生まれつき才能があったのか

私はシケリアに居たころ自分で料理法を学びまして、それで私が料理すると、お客さんたちが美味しさのあまり

鍋の中にまで歯を突っ込もうかという場合も度々で……

〈出典〉アテーナイオス 一六九D、「バタニオン *batanion* [鍋の一種] という語はアンティパネースが『エウテュディコス』で用いている。【アンティパネース断片三七】。また、アレクシスが『アスクレービオクレイデース』で、【本断片】。なお、二行末から四行末までは、アテーナイオス 一〇七Dのアレクシス『クラテイアもしくは薬屋』からの引用断片(断片一一五)の二行(二三行)にはほぼ等しい「鍋」に当たる語が違っているだけ」。なお、ポルックス 一〇・一〇八に、「アレクシスは『アスクレービオクレイデース』でバタニア *batania* [平皿] という語を用いている」とある。

【注】バタニオンは[*S*]にも載っていない名詞であるが、アテーナイオスの引用箇所前後では調理用の鍋もしくは壺の名称が話題になっている。ポーティオスの辞典 *β* 九三によると、バタニオンは *ροβας* *robas* のことで、アレクシスがその意味で使っているされる。ロバスは平たい皿もしくはフライパンの意で、(今日も見られるように)調理器具と料理を出す皿が厳密には区別しにくい場合もあったかと思われる。〈出典〉で述べたように、「食事客が鍋の中にまで歯を突っ込む」という表現は、アレクシスが他の喜劇の断片でも使っている、これは「皿まで舐める」に当たるような決まり文句だったのかもしれない。

『放蕩教師』

ΑΣΠΟΔΙΑΣΚΗΟΝ

この喜劇がアレクシスの作かどうかは、意見の分かれるところであり、*Knock* はまったくアレクシスらしくない断片だというが、真贋については決定的な証拠に欠けている。それは一二行に及ぶ断片を引用しているアテーナイオス自身、八〇〇篇以上の中喜劇を読んだといっているのに、この作品の現物は見たことがなく、多少の疑念を抱きながら、アレクサンドリアのソーテイオン(前二世紀ベリパトス派の学者)から孫引きしていることが大きな原因である。

二五

なぜそんなお喋りをする？ 下らぬことをあだこうだ、リュケイオンだの、アカデーメイアだの、やれ音楽堂の門だの、ソフィストたちの無駄話だのと？ まともなことなど一つもない。さあ飲もう、酔っ払おう、シコーンよ、シコーンよ、さあ、愉しむのだ、命を養うことができる間は。さあ、どんちゃん騒ぎだ、マーネースよ。口腹の欲に勝る喜びはない。それだけがお前の父でありまた母でもあるのだ。名譽だの、地位だの、將軍職だのなんぞは。やかましいけど中身の無い大法螺で、夢みtainなもんだ。定めの際になると死に神が来て、冷たくなっちゃうんだ。食ったり飲んだりした分だけはお前のものだが、後は灰だ、ベリクレースも、コルドスも、キモーンも……

〈出典〉アテーナイオス 三三六D、「バックキダースという、サルダナパッロスと同様の生活を送った男は、死に臨んで墓に次のような銘を掘らせている。

飲めよ、食べよ、何事も心の赴くままにせよ。
バックキダースの代わりに立つわれは墓石なれば。

アレクサンドリアのソーティオンが『ティームーンの諷刺詩』という書物の中で、アレクシスは『放蕩教師』で——（私はその喜劇にお目にかかったことがない。私はいわゆる中喜劇を八〇〇篇以上読んだし、それらの抜き書きを作ったが、『放蕩教師』というのは見かけたことがなく、価値ありとして書籍目録に載せられた例も知らない。カッリマコスも（ビザンティオンの）アリストパネースも書籍目録に載せなかったばかりか、ペルガモスで目録を作った人たちも同様である）。——ともかく、ソーティオンが述べているところでは、その喜劇の中に登場するクサンティアースという奴隷は、仲間の奴隷たちを愉しい生活へといざなって、次のように言っているそうだ。【本断片】。

【注】人生は儚い、今日を愉しむべしといった考え方はギリシア文化の底流にあって、時折泡沫のごとく文学作品の形をとって浮かび上がることがあったが、その過激な例は大小のアリストIPPUS（大アリストIPPUSは前三五頃〜三六六、小はその孫）などキユレーネ学派の快楽主義となった。アレクシスを含む中喜劇の時代は、ペロポネネーソス戦役の終結から、アレクサンドロス大王の死までの、全四世紀初頭から末近くまでの一世紀に満たない期間で

あり、この混乱の時代には喜劇も政治批判、個人攻撃、パロディ精神を失い、あるいは枷をはめられて、風俗、人情、日常生活をテーマとした小市民的性格の濃いものになっていく。この断片などはそういう時代のやり切れない閉塞的状况を庶民（ここでは奴隷）の側から捉えた一面があつて、興味深い。

リュケイオンはアテーナイ北東のリュカベッテス山（石灰岩からなる丘）の西もしくは南西にあつたリュカイオス・アポロンの聖域のある地区でアカデーメアやキュノサルゲースと同様体操場もあつた。ソフィストたちが弟子を教える場所にもなつたが、アリストテレースがここで三〇年にわたつて講義し、それは弟子たちに受け継がれたので、リュケイオンはペリパトス派の代名詞になった。アカデーメアはアカデーミアとも呼ばれ、アテーナイ北西の地域で元は女神アテーナーの社と聖域があつた。プラトンはこの遊歩道で講義を行い、後にミューズの社と講堂を建て、プラトン学派の牙城として榮えて、後六世紀まで存続した。「音楽堂」としたオーディオンOdeionは、オーデーγῶν「歌」の派生語で、歌曲、詩の朗唱や合唱、その他音楽のための施設であるが、今日の文化会館のように講義や議論にも使われた。特にここは、ディオゲネース・ラーエルティオス『ギリシア哲学者列伝』七・一八四に、（哲学者クリュシッポスが）「音楽堂で講義をしていて」という表現が見られることに注意したい。クリュシッポスはストア派の三番目の学頭であるが、前三世紀末の生まれなので、アレクシスとは時代的に齟齬がある。しかし、彼以前のストア派のゼノンやクレアンテースが音楽堂を用いなかったという証拠もないし、逆にこの断片がアレクシスの真作かどうか意見の分かれるところである。もっとも、これは別に学派を代表するわけではないかもしれない。なお、

オーディオンは他にもあるが、時期的にはペリクレスによって建築されたアクロポリス東端の南にあったものを指していると見てよからう。ただ、音楽堂の「門」となっているのがやや腑に落ちない。それで、一部校訂して、門 *eklogas* をパリン *palin* 「また、さらに」という副詞に変えたり、柱廊を指すストア *stoa* の対格形に変えたりする案が出されている (Kock など)。プルータルコス (『モラリア』《亡命について》六〇五A) にもアテーナイの学問所を列挙した箇所があり、そこではこの断片の四箇所に加えてストアも挙げられている。

シコーンは、文学作品としては、メナンドロス『気難し屋』にも料理人 (奴隷か?) として登場する人物の名でもある。マーネースは [S] に喜劇でブリュギア人奴隷としてよく登場する人物名であり、アリストパネースでは一般に奴隷の意味で用いられたり (『鳥』五二三)、無知蒙昧な人間を指したりする (『蛙』九六五)。この断片の話者とされるクサンティアースもギリシア喜劇では代表的な奴隷の名である。

「名譽だの……」、シモーニデース (前六〇五の合唱抒情詩人) 五二二 (PMG) に、「あらゆる物事はたった一つの恐ろしい大渦巻きに行き着くのだから、／名譽も富も」とあり、類似の文脈で同じ語 (アレタイ *ἀρεταί* (名譽と訳した)) が用いられている。

ペリクレス、コドロス、キモーン……ペリクレスはいうまでもなく、前五世紀のアテーナイ最盛期に実質的な支配者として君臨した政治家。コドロスは伝説的なアテーナイ王で、王政最後の王とされる。キモーンはミルティアデースを父とする名門の出で、ペリクレスとは対立関係にあった政治家。ペリクレスやキモーンに比べてコドロスは実体に薄く、上記二人と並び称されるのはやや奇

異に感じるが、当時のアテーナイ人にとってはさほどでもなかったのかもしれない。

『アタランテー』

ATAANTH

アタランテーは神話上の人物で、求婚者たちと競争し、負けた者を次々と殺したが、ヒッポメネースが、黄金の三個の林檎を追いつかれそうになると一つずつ投げて、アタランテーがそれを拾っている間に競争に勝ち、妻とした話が有名である。断片 (二六) は『反アッティカ主義辞典』に載る、「小さな声の」という形容詞一語のみである。